生保文化センター

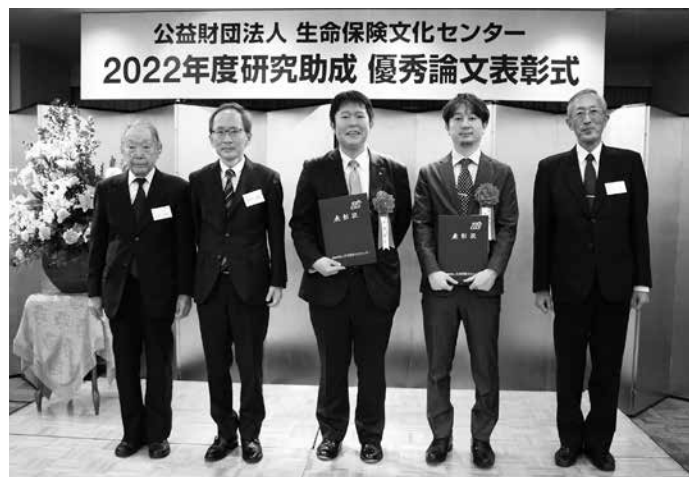
「研究助成成果論文 優秀論文報告会・表彰式」開催

若手研究者の育成促進

生命保険文化センターは11月25日、東京都千代田区の「LEVEL XXI 東京會舘」で2022年度「研究助成成果論文 優秀論文報告会・表彰式」を開催した。若手研究者の育成促進を目的とする成果論文表彰制度の受賞者を表彰するもので、今回は、20年度の助成により21年度「生命保険論集」に発表された成果論文から、東京大学大学院総合文化研究科助教の坂井晃介氏が「民間保険組織を通じた政治と経済の構造的カップリング―世紀転換期における英独社会保険形成の比較歴史社会学―」で、青山学院大学大学院国際マネジメント研究科准教授の伊藤晴祥氏が「リスクファイナンスを利用したパンデミックリスクマネジメントに関する一考察」でそれぞれ優秀論文賞を受賞した。両氏による受賞者報告のほか、表彰状の授与や情報交換会などが行われた。

表彰式に先立って、坂井氏と伊藤氏が受賞者報告を行った。「保険会社は福祉国家の形成にとっていかなる意義を歴史的に有してきたか」をテーマに研究を行い論文にまとめた坂井氏は、研究目的や方法、分析内容とその結果について説明した。研究方法については、比較歴史社会学にのっとって社会保険の歴史的発展を政治と経済の組織を通じた構造的カップリングとして再解釈したとし、民間保険組織が作り上げていった知識やテクノロジーがいかに社会保険の形成を支えたのかを紹介。19世紀後半から20世紀前半にかけてのドイツと英国の事例比較を行い、両者の関わり方の違いを考察したと説明した。論文の結論として、「福祉国家形成における民間保険組織の歴史的意義とは、組織を制度へ包摂あるいは排除、知識・技術を導入あるいは無視する、そうした形で民間保険は社会保険に影響を及ぼし続けてきた、という意味で非常に重要な位置付けが与えられる」と述べた。

東大・坂井氏、青学大・伊藤氏が受賞者報告



左から玉田氏、浅野氏、伊藤氏、坂井氏、山下氏

一方、研究論文でパンデミックリスクマネジメントの実務的な手法をリスクマネジメントの理論に従って体系的にまとめ、パンデミックリスクファイナンスとしてパンデミックボンドおよび相互支援プログラムの有効性を検証した伊藤氏は、研究のきっかけや論文の概要について報告した。最後に、論文で検討されていなかったパンデミックボンドによる富の移転や、保険会社がパンデミックボンドを発行し保険を提供した場合、あるいは相互支援プログラムを提供した場合の実現可能性など、論文投稿後に実施してきた研究内容を紹介した。

受賞者報告に続いて、表彰式が行われた。最初にあいさつした生保文化センター代表理事の浅野僚也氏は「報告会、表彰式とも4年ぶりのリアルの開催となり、終了後に引き続き情報交換会も実施させていただく。本日お集まりいただいた皆さま方には、受賞者に対してお祝い、激励、今後の研究活動に関する示唆や助言をしていただければと思う。また、学会、業界、それぞれの枠を超えた産学交流の場としていただければと思う」と述べた。続いて、浅野氏から両者に表彰状が授与された。

また、祝辞を述べた生保文化センター学術振興委員の玉田巧氏（元大阪商業大学）は「坂井氏と伊藤氏の論文は、三つの点で非常に良い論文だと思う。一つ目は材料となる研究対象、二つ目は理論をベースにした分析、三つ目は研究の結論であり、非常に優れた論文を書いていただいた」と述べ、二人の今後一層の活躍に対する期待を示した。

その後、情報交換会が行われた。最初にあいさつした生保文化センター評議員会会長で同志社大学大学院司法研究科教授の山下友信氏は「二人の論文を読ませていただき、非常に勢いがあると感じた。これを機にさらに上乗せして伸びていく研究を続けていくことをお願いしたい」と激励した。その後、参加者皆で乾杯し、歓談した。